

香港金門同郷会について

黄 英哲 服部 健治

(要旨)

19世紀半ば以降、金門の青壮年たちの多くは活路を開くため、廈門を経由して海外へと向かった。その足跡は遍く東南アジアや日本の長崎、神戸などの地に及び、その滞在先では金門会館や金門同郷会を設立して互助的な組織を作った。特に、中国人と欧米人が雑居する地で、冷戦時期やポスト冷戦時期に前哨とされた香港における金門華僑の動態は仔細に観察する価値があるものの、これまでに香港の金門華僑社会に関する研究は十分になされていない。そこで拙論では香港金門同郷会についての初歩的な検討を試みる。

一、僑郷金門⁽¹⁾

19世紀半ば以降、金門の青壮年たちの多くが活路を開くため、廈門を経由して海外へと向かった。その足跡は遍く東南アジアや日本の長崎、神戸などの地に及ぶ。その滞在先では、郷団あるいは金門会館や金門同郷会を設立して互助的な組織を作り、また故郷金門の民間信仰や日常生活の文化を伝えていった。

金門人の海外への移民は、早くは17世紀半ばにまで遡ることができる。16世紀から18世紀半ばまでに、多くの金門人が生活のため南洋や日本へ

(1) 金門は福建省東南沿海にある島で、中華民国(台湾)の領土に属す県。面積は約152km²、人口は14万人弱。中華人民共和国側とは最も近いところで2km程しか離れていない。金門県は主に金門本島(134.25km²)と烈嶼(14.85km²)、大澄(13.2km²)、小澄(0.88km²)等の四島のほか、さらに大胆島(0.79km²)、二胆島(0.28km²)等の10個の小島からなる。金門の位置関係は最終ページの地図を参照のこと。

と向った。19世紀半ば以降、金門から海外への移民の規模は拡大し続け、20世紀半ば頃までに、海外移民ブームが四度発生している。

最初のブームは1860年代である。内的要因には金門の耕地不足、連年の凶作による経済問題があり、外的要因には1860年の「北京条約」による中国人労働者の海外移住の合法化や、イギリス人ラッフルズが1819年にシンガポールを取得後、重商主義・自由港政策をとったことにより、生計のため連れ立って海に出た金門の農村余剰労働力を大量に吸収したことが挙げられる。

二度目の移民ブームは1912年から1929年の間で、中国では軍閥が割拠して政治や社会が不安定であったのに対し、南洋は比較的社會が安定して商業が発達していたため、活路を求めた金門の青壮年男性を多く吸収した。

三度目の移民ブームは1937年から1945年の日本が中国に侵略した期間で、移民の要因は戦乱である。1937年10月日本軍が金門を占領して民工、物資、土地を強制的に徴収し、それは1945年8月に日本が投降するまで続いた。金門の青壮年層の人々は日本軍の夫夫になりたくないために、同郷や親戚を頼りに続々と南洋に逃れた。

四度目の移民ブームは1945年から1949年のまさに国共内戦期間であり、金門の青壮年層は国民党軍隊の「抽丁」（徴兵）を逃れるために相次いで南へと逃れた。この百年余りの間に、金門では海外への移民が続き、人口は激減した。これは特に青壮年男性に顕著である〔江柏煒2017, 93-96頁〕。

近年、金門人の海外への移民は、主に東南アジア各国、シンガポール、マレー半島、北ボルネオ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、ビルマ等の主要な港町に分散しており、広く日本の長崎、神戸や香港等の地にも及ぶ。1987年版の『金門縣志』上巻「華僑志」によると、金門出身の華僑はシンガポールが最も多くて約10万人、マレー半島には約44,000人で、中でもスランゴール州のクランが約10,000人と最も多い。うち古寧籍が3,000人ほどを占める。これは古寧頭村の現在の人口の3分の2にあたる。ダルサラームやサラワク等を含む北ボルネオにはあわせて約6,000人、その中ではダルサラームが最も多く、ほとんどが烈嶼出身である。インドネシアには55,400人余り、主にスマトラ、ジャワ、ボルネオ、スラウェシ、ニューギニア等の地区で、大部分が金門の金水、古崗、旧金城、後埔、西浦頭、

瓊林等の地から来ている。フィリピンには約5,000人で、古寧頭、珠山、後埔、埔辺、斗門、東蕭、官澳、盤山出身の者が多い。ベトナムは約2,000人、ほとんどがサイゴン、チョロン地区等の港町に住み、古寧頭、下坑、瓊林、旧金城、賢厝、大澄の出身者が多い。タイには約500人で、バンコクに多く住み、安岐出身が多く、その次が烈嶼出身である。ミャンマーには約600人、ヤンゴンに多く住んでいる。香港は約300人、日本は約400人で神戸、東京、大阪が多いが、長崎、横浜、名古屋、京都にも少数が住んでいる。山後、新頭、下坑の出身者が多い。欧米には約50人となっている。

以上のように、海外で暮らす金僑はあわせて約21万人余である。長期間度々海外で生活をしているか、当地で地元の人と結婚あるいは土着化した者を統計化する方法はないが、海外で生活していてもやはり故郷の金門に籍を置く者は、1966年の金門県政府の戸籍統計によれば22,414人で、そのうち男性は19,054人とその比率は85.01%に達する。

江柏煒は1971年の人口統計から、早くも金門から海外へ出た人の数が同時期の金門の人口数を超えていたことを指摘し、金門が移民の社会であることを明らかにしている。中でも、同郷、同族の者は続いて同じ場所に向かうことが多い。金門の華僑の多くは自由移民の身分であるが、自由移民として海外の国に向かう際、通常は任意に行き先を選ぶのではなく、大半は移住先に親戚や同郷の人がいるかどうかで決めている。それは一般に後続の自由移民は先発の親戚や同郷の人を頼って、移住生活のスタートをサポートしてもらえるようにするためである。このような移民の構造を「連鎖式移民」と言う。また江柏煒は、金門を華僑の故郷「華僑之原郷」とし、金門こそ海外各地に分散居住する金門華僑の心の故郷であると定めるにあたり、以下の4点を指標としている。1.移民或いは帰国華僑、華僑の親族の人数の割合がこれらのコミュニティ総人口の10%あるか。2.華僑マナーのネットワークとその影響。3.文化的アイデンティティ、特に海外宗親會館の設立。4.社会ネットワークによる関係。〔江柏煒2017, 96-106頁〕

これら4つの指標は大体において的を射たものであり、海外各地に分散して居住する金門華僑の社会に特有の問題と言えよう。特に中国人と欧米人が雑居し、冷戦時期やポスト冷戦時期に前哨とされた香港における金門

華僑の動態は仔細に観察する価値があるものの、これまで香港の金門華僑社会に関する研究は十分になされていない。そこで拙文では香港金門同郷会についての初歩的な検討を試みる。

二、香港に移住、移民する金門人

金門人はいつごろ香港へ移民・移住を始めたのか。特に「九七」前後における金門人の香港への移動（「移住」あるいは「移民」）について、これより更に整理と検討を加えていこう。「九七」の香港返還前後に香港に移り住んだ華僑について、中国の法律定義上では、いわゆる「華僑」には、特に「香港帰国華僑（略称「香港帰僑」）」というグループの身分は存在せず、一律に「海外中国人」あるいは「大陸中国人」と称される。目下、香港の「香港帰僑」の数は約50万人、その親族を含めると100万人になり、少なくとも香港総人口の7分の1を占める。福建、廣東、潮州出身者が多い。

彼らは、国外（多くは東南アジア）で生まれ中国大陸に戻った後さらに香港に移った者、あるいは生まれは中国大陸だが国外（東南アジア）に住んでから香港に定住した者、または中国大陸に住んでいたが香港に移住した者等、放浪と離散を繰り返している。さらに、戦前の移民ブーム、第二次世界大戦、国共内戦、中華人民共和国建国初期、反右派闘争、文化大革命、改革開放、「九七」などの歴史の転換期を経験してきた。以下では、現香港金門同郷会長許丕新氏より提供されたインタビュー資料に従って、近年金門人が香港へ移住、移民した原因を描き出してみたい。

事例A (2007.12インタビュー):

私の祖籍の地はもともと金門県大嶼郷の小嶼島です。1949年以降には泉州南安県小嶼島に属し、現在は廈門市翔安区に管轄が置かれているようです。私は別の地で生まれ、後になって自分がもともと小嶼人であることを知りました。成長してから小嶼の事情をいろいろと知りました。小嶼には前保と後保に分かれた二つの村しかなく、村の一つは許姓、もう一つは邱姓です。しかも小嶼の邱家は宋末の儒家丘葵の末裔でもあります。

私の父は小嶼で生まれました。小嶼を出てすぐに漳州市に行きました。

私は漳州で生まれ育ち、その後中国国内で就学し、就職しました。そして1988年に私は香港に来ましたが、学校から就職までずっと大陸にいました。香港に来た後は、まず香港の福建省人民政府が手掛ける会社で1993年4月まで働きました。(そして民間企業に転職しました)。

事例B (2007.12インタビュー):

私の祖籍は金沙鎮後浦頭で、私の父には4人兄弟がいます。早くにインドネシアで騒乱があったときは、我が家は拔嘎瑪祿(地名の音訳、場所は不明)で郊外まで物産を仕入れて売りに行く商売をしていました。行動を共にする人はあわせて14人でした。2回目に入境した時、私の2番目の叔父は殺され、3番目の叔父は山を転げ下りて難を逃れましたが、2年前に亡くなりました。私の父親もすでに亡くなりました。4番目の叔父は健在で、シンガポールに住んでいます。

私の父は13歳でインドネシアに行きました。当初は飯炊きをして皆を手伝いました。その後2番目の叔父も行き、3番目と4番目の叔父もそれに続きました。私が5、6歳ぐらいの時に、父の事業はととも大きくなりました。貿易の仕事で、インドネシアの物産を収集してシンガポールに送り、商品を雑貨店に渡す仕事です。

私は1942年に生まれました。上に兄が1人います。叔父がいずれも南洋に行ってしまった後、家には人がいなくなり、私の祖母が引き取って世話をしてくれました。祖母はもともと金門に住んでいましたが、後に台北に引っ越して行きました。私は1949年に読み書きを始め、1955年に小学校を卒業しました。小学校は拔嘎瑪祿にある培英小学で学びました。住んでいるあたりには中国語の中学がなかったため、13歳で小学校を終えると、私は美但(地名の音訳、場所は不明)の梅花中学まで行って学びましたが、もうすぐ高一を終えて高二に上がろうという頃、1960年にインドネシアの華人排斥にあったため、拔嘎瑪祿に戻りました。培英小学校は大きく、1年から6年まであわせて十数クラスありました。一学年は2クラスか1クラスで、私のクラスは40人ぐらいでした。金門人が大体3分の1を占めていました。あの当時先生はみな美但辺りから来ていました。美但にも金門人は多く、先生の中にも金門の人がいました。インドネシアの華人排斥

が始まると学校が閉校になってしまい、高校は卒業しませんでした。

私たちはインドネシアに留まらずに中国に帰りたかったのですが、母は金門に、父は大陸に帰りたがったため一年あまり伸びてしまいました。大陸から船が迎えに来るのに、一年ほど船を待ちました。私たちは自費でジャカルタから船に乗り広州にやって来ました。広州についてからすぐ福建に行きました。福建には姉が一人いて、私たち家族が福建華僑農場辺りに住めるよう手配してくれました。漳州のその華僑農場に住んで私は学校を続けました。

卒業後に私は広州暨南大学を受験し、大学卒業後は広州に配属されて教師になりました。広州の郊外です。広州仏岡県で数十年数学の教師をしました。高校の教師です。1968年に大学卒業後、2年間部隊で訓練しなければなりません。山の上下りを部隊について訓練しました。そこには1970年に配属され、1971年に教師をはじめ、1981年になって香港に来ました。

妻とは1973年に結婚しました。私が県の仕事を配分されたばかりのときに、以前澳門から戻って国内のゲリラ活動や革命に参加して副公安局長になった人がいました。運もよかったのか県の公安局長から学校の校長にまでなったのですが、彼が私の状況一國策で私たち外国から戻った者は出国したければでき、私の妻も帰国華僑でしたが、私が幹部だったため、出国したくても容易に承認されませんでした。一を知り、そこで、配偶者がどこにいるかを理由にすれば、私の出国が容易になるということで、彼の助けで私の妻を先に出国させました。妻は香港の彼女の親戚のもとに身を寄せました。私は1981年にやっと香港に来ました。

事例C (2007.12インタビュー)

私の祖籍は金門洋山で、1941年にインドネシアで生まれました。私には上に3人の兄と4人の姉、それと妹が一人おり、9人兄弟の8番目です。最初に私の父が先にインドネシアに行き、その後母も行き、私たち兄弟姉妹はみなインドネシアで生まれました。父は1955年に、母は1977年に世を去りました。二人ともインドネシアで亡くなりました。

我が家は祖父の時代からインドネシアに渡りました。確か祖父が先に

行って生活が安定するのを待ってから、祖母を含め伯父、私の父、さらに叔父と従兄も行きました。そこでは最初みな一緒に暮らしました。金門の我が家は人が少なくなり、一番親しかった従兄は、彼の家も早くから台湾に渡り台北に住みました。金門には家だけが残りました。従兄と彼の母はインドネシアに行き、再び家には帰りませんでした。他に私にはもう一人シンガポールに従兄がいます。彼は船の仕事をしていて、香港や南洋で多く仕事を持っています。

私の物心がついたときから、父はインドネシアで商売をしていました。インドネシアには多くの島があります。父はこれらの島から商品を買入れ、船に積んで別の島まで売りに行き、さらにそこから仕入れて持ち帰り、こちらで売るといような商売をして、各島の間で卸売りをしていました。

1956年は私が中学を卒業した年ですが、その後大陸に行きました。当時インドネシアの中国人学生は、蜂の巣をつついたように一斉にみな大陸に勉強に出かけました。ほとんどの華僑はこうして大陸に戻って勉強し、改革開放後の数年でまた大陸から出ていきました。私はそのときは天津の高校に通い、高校を卒業して北京師範大学に進学し、卒業後は北京市内の学校で教師をしました。当時北京での生活はかなり困窮していて、生活物質はかなり缺乏していました。北京で10数年教師をして、1976年になり香港に来ました。前後あわせて20年大陸で生活しました。1956年から1976年のちょうど20年です。

大陸では文化大革命の時期はとても混乱していたので、開放後に大量の人が逃げ出しました。香港では1970年から1980年の10年の間に、香港の人口はおよそ100万人も増加しましたが、ほぼみな国内から来た人です。

事例D (2007.12インタビュー)

私は1962年に生まれました。兄弟姉妹は6人で、第2人と妹3人の私は一番年長です。祖籍は福建省金門県、父は八二三砲戦のとき台湾に避難して台北県の永和に住みました。父は私が生まれてすぐのころは、香港に来る前で、インドネシアのある華僑に雇われはじめたばかりでした。しばらく働いた後自分で事業を始め、毛髪業、運輸業、電子業、電機業に相次いで従事しました。

私は台北の永和で生まれました。4歳で台湾を離れましたが、当時は小さかったので、台湾での生活はおぼろげですが、幼少期の遊び相手はみな自分の親戚の子供だったことは覚えています。私は1966年に母と香港に着き、父とともに一家揃いました。どんな状況だったかはあまり印象がありません。

事例E (2007.12インタビュー)

私は1944年にインドネシアで生まれました。8人兄妹の3番目です。父の祖籍は金門後湖です。1960年のインドネシア華人排斥のとき、私はちょうど高一で、父は私を北京まで勉強に送り出しました。私より先に兄が12歳の時に北京に勉強に行っていました。私は北京の高校を卒業し、北京大学西方語言文学系に合格して英語を学びました。北京大学卒業後は杭州に行って教師をするよう配分されましたが、後に病気になり5年間ずっと治らなかったので、香港に治療に行く申請をし、それ以降香港にとどまっています。1971年11月のことです。当時父と母は、1965年のインドネシアで発生した9.30事変より前に、たまたま1ヶ月間観光で帰国していたため、政変後情勢が混乱するともうインドネシアには帰れなくなってしまい、香港に移り住んでいました。

1989年に一度金門に戻りました。その時は父母と一緒に戻りました。父は金門を離れてすでに50数年も経っていました。半世紀が経ち、とても戻りたがっていたので、私たちは一緒に戻りました。当時はまだ金門には多くの軍人がいて、制限もたくさんありました。父は私たちを連れて至る所を見に行き、ここは誰誰の家だと教え、小さい頃放課後になるとすぐあの友達の家に行ったなどと話しました。回りながら故郷の人に同級生について聞くと、大部分がもうおらず、ある者は引っ越し、亡くなった人もいと聞き、感慨深い思いでした。父と母は半世紀も故郷を離れて再び故郷を望むことができたので、興奮していました。

私の母は歐厝の人で、姓は歐陽と言い、彼らの家は農家で、母も小さいときは畑に出て手伝ったとのこと。私と母が戻った時、彼女のおばや親戚に会いに行くと、みな村にいました。金門で私たちは海辺で過ごしたこともあったのですが、その海岸はきっと大陸に行けるのでしょうか。ガイ

ドが私たちを連れて行ったときは、旅行客は海辺までいけないと教えてくれました。当時海辺は禁區でした。

私の父がインドネシアに行ったとき、祖父母は二人とも行かずに金門にとどまりました。1958年に金門と廈門の兩岸で砲撃が始まると、金門で暮らすのはかなり危険になり、そのため私のおじ、おば、いとも含めてみな台北に引っ越しました。おじは祖父母も台北に迎えました。それ以来金門に戻れなくなりました。しかしおばのひとは台湾に引っ越さず、彼女には娘も何人かいますが、やはりみな金門で教師をしています。そのためおじたちはたまに金門に帰るときは彼女たちに会いに行きます。

1989年に父母が金門に帰ったときは、50数年も離れていたおば一家に会いました。みんなとても感激しました。老いた人たちは生死離別を経験して再会したような複雑な気持ちでした。恐らく私たち普通の人にはとても感じることはできないでしょう。

事例F (2007.12インタビュー)

私は1958年にインドネシアで生まれました。父と母はインドネシアで結婚し、私たち兄弟姉妹はみなインドネシアで生まれました。兄弟姉妹は10人で、私はその中の9番目です。私の前に4人の兄と4人の姉、それと妹が1人います。母にはまず女の子が4人できましたが、男の子がいないと父の商売を手伝えないため、その後ようやく男の子4人が生まれ、さらに私と妹を産みました。我が家の祖籍は金門後湖で、母は古崗の人です。現在は香港に住み、母と兄が私の上階に住んでいます。1967年のインドネシアの華人追放事件の時期に、私たち家族はインドネシアから中国に帰り、1978年になってさらに香港にやって来ました。

事例G (2007.12インタビュー)

私は1979年の元宵節に廈門市集美で生まれました。祖籍は金門後浦です。祖父は元集美学校理事です。かつて祖父は集美で中学まで進み、その後廈門大学を卒業して母校の集美に戻り中学で教師をしていました。抗日戦争の前に集美学校の理事会を引き継ぎ、校務を取り仕切りました。

祖父の兄弟姉妹と、さらに父の兄弟姉妹は、どちらも親戚がとても多い

ですが、現在は大部分がカナダに住んでいます。父は1944年の抗日戦の時期に安溪山区内で生まれました。当時集美学校は安溪に移転していたため、幼少期はそこで過ごし、抗日戦勝利後にまた金門に戻ったと祖母が話していましたが、父本人は知りませんでした。父には4人の兄と3人の姉、さらに妹が1人います。祖母の傳家方の人は多くがマレーシアにいます。

父は中医師です。父は1993年に香港に出て来ましたが、私は集美の八音楼で生まれ、幼少期からそこに17年住み、1995年の年末になって香港にやって来ました。1993年に父が香港に来た当初は、自分一人で先に来て、おばの家に間借りしました。叔母も父のことをよく気にかけてくれ、仕事を探すのを手伝ってくれました。文革の時は、祖父も批判闘争の対象にされました。当時管理クラスのリーダーが主に狙われており、祖父はその頃ちょうどその中でも最も高い地位にいたため、彼らに連れて行かれました。

祖父のつるし上げは最もひどく、主に海外との関係面に狙いをつけられました。海外に学校関係の友人が多くいたので、当時祖父に手紙を書かせて、海外の友人も引っ張り込もうとしました。祖父にこうした海外の友人がどんな悪事をしたか無理やり書かせようとしたのですが、友人は何の悪いこともしていないので、祖父は頑として書かないで通しました。そのためつるし上げられ、祖母ですらも一時監禁されました。このような状況はおばと父がよく覚えています。特に父は当時毎回下放から帰って来ては、祖父の世話をして、毎日食事を届けました。監禁されて食事を食べさせてもらえなかったからです。

事例H (2007.12インタビュー)

私は1942年生まれで、兄弟姉妹は8人です。祖籍は金門後浦です。祖父は清末に科挙の試験に参加したことがありますが、上位にはなれなかったため、故郷に帰って宝飾店を経営しました。シルバーアクセサリーを制作して繁盛させました。店舗は後浦南門に構えました。

父は年少から聡明で読書が好きでした。母方の祖父は若い頃祖父と親友で、彼らは一緒に科挙試験に参加しました。順位発表で母方の祖父は秀才に入りましたが、1905年に清朝は科挙試験制度を廃止したため、祖父の官吏への道は断たれてしまいました。その後、祖父は海外華僑の招請で3

度外国に赴き、大いに見識を広げました。そして工商業の発展に尽力し、金門商会会長に任命されたこともあります。

父は13歳の時集美中学で学びました。中学から高校まで学び、1925年に高校を卒業するとき優秀な成績だったことにより、集美学校の「成美貯金」の支援を受けるとともに推薦で廈門大学の予科に入りました。後に本科に進み歴史学を専攻しました。1931年に廈門大学を卒業し、集美中学に戻って教員となり、1934年に集美中学校長に就任しました。27歳のときです。1936年1月15日に開かれた全国各省市中等及び専科以上の学校校長の代表会議で福建省中等学校校長を代表し行政院に出席しました。1936年の年末にマレーシアのムアル中学の校長に招聘され、船で南洋を渡りました。1937年1月シンガポールに到着すると、父がムアル中学校長の職に招聘されたことを陳嘉庚が知り、途上のシンガポールでわざわざ父と会見しました。父は陳嘉庚の学校経営に対する精神理念に深く感動し、1937年5月に陳嘉庚の命を受け、帰国して集美学校の理事に就きました。

1937年6月父は集美中学に戻って執務をするとともに一連の改革を提出しました。抗日戦の8年間我が家はずっと安溪に住みました。1945年抗日戦に勝利すると、学校はまた集美に戻り、私たちも集美の理事用家屋に引っ越しました。1949年に中華人民共和国が成立し、父はそのまま集美中学の校長の職を1956年の退職まで務めた後、同年7月に集美僑校学生補習学校副校長に転任しました。当時副校長は4人いて、父だけ共産党員ではありませんでした。

1956年中国共産党中央は知識分子に百花運動を鼓舞し、民主的な意見を歓迎しました。当時父は省の政協委員をしていたので、知識分子の良識に基づいて廈門日報に投稿し、当時の政治を批判し意見を提言しました。しかし1957年4月の整風反右運動で、父は右派として打倒され、1967年に文化大革命が始まると、我が家は8回も手入れに入れられ、紅衛兵は家の中を徹底的に荒らして、上から下まですべて家探ししていきました。父はプレートを下げて町を歩き回るよう強制されただけでなく、集美僑校に監禁されました。家には母と弟と妹だけが残されました。

1980年を前に、海外の外賓が何度も集美を訪問に来て、以前の老理事長に会いたいと指名したため、上級部門は父に賓客と会見するよう通知し

てきました。1980年以後、父は集美学校校友会の顧問、廈門大学顧問、集美総会の理事長など殆どの肩書を回復しました。そのとき父はすでに73歳の高齢になっていました。1982年、中国共産党当局は父の人望を通じて、新たに集美中学の海外の学友とコンタクトを取り、彼らに祖国への投資を要請しようと、中央統一戦線工作部は香港の訪問団を組織し、その団長に父を指名しました。父は当時ちょうど陳嘉庚に関する資料の収集整理、集美学校八十周年記念事業、集美学校校史の編纂と忙しかったため、表立ったことはしたくなかったのですが、当局が譲らなかったので、父は党からも必ず人を派遣して参加するよう要求しました。遂に訪問団が本決まりとなり、集美学校の代表団が香港を訪れると、香港集美校友会の熱烈な歓迎を受けました。

その関連で、私にもチャンスが与えられ、改めて勉強をし直して受験し、その後香港イギリス連邦の医学生に合格しました。70年代国際情勢は大きく変化し、中国共産党中央は対外的に開放政策をとり、華僑は出国申請ができましたが、人数制限があり、毎年50から150人の出国が審査のうえ許可されました。私の先生は1974年に出国を申請し、1977年によく許可を得て、同年香港に行きました。私は1980年に出国しました。

事例I (2007.12インタビュー)

私は1945年5月30日にインドネシアのカリマンタン島サマリダ市で生まれました。兄弟姉妹は5人います。我が家は早くからインドネシアに来ていました。父はインドネシアに来た当初は、船員として働き、1950年代にはジャカルタで会社員をし、その後ココナッツフレークの商売もしました。生前に金門に帰ったことがありますが、1949年以降は帰ったことはなく、1973年に63歳のときインドネシアで亡くなりました。

私の母も金門で生まれ、後にインドネシアに移りました。父がインドネシアで他界したため、母も香港に移り住み、息子、娘と一緒にになりました。私の一番上の兄は今年73歳で、現在も香港に住んでいます。かつてプラスチック工場を開いていましたが、今はもう引退しました。2番目の兄は既に世を去りました。上の姉も香港で、以前は会計の仕事をしていましたが、退職したばかりです。2番目の姉は健康食品の連鎖販売取引をしてい

ます。

1953年に我が家は全員でカリマンタンからジャカルタに引っ越しました。そこですぐ私は協和小学校に進学し、1960年にジャカルタ（椰城）の巴中で中学に行きました。生まれてから中学までの期間はインドネシアで過ごしました。1960年5月、当時15歳の私は2番目の姉、それからインドネシア華僑の子弟何人かと一緒にジャカルタから船に乗って広州へ行きました。祖国に戻り勉強するという夢の始まりでした。私たちは広州で何日間か接待所で待っただけで、すぐに廈門の集美に配属され、集美僑校で3ヶ月もしないうちに、順調に集美中学の高校一年に入りました。

1964年に集美中学を卒業したのち、泉州華僑大学中国語言文学系を受験しましたが、その頃ちょうど「四清運動」が始まってしまい、閩北で働きながら一年学んだだけでした。1966年文化大革命の勃発後、学校は革命の騒ぎで全面的に講義を停止しました。私の集美中学から求めていた学問の夢は、突然悪夢の大学生活へと転落しました。1969年に泉州華僑大学卒業後は、大陸ではまさに文化大革命の期間にあたり、社会秩序は混乱していました。

私は1970年にやっと安徽合肥二中で中学の語文教師に配属されました。そのときも文革の動乱は続いており、学生の求学意欲は低下していて、私は一年教えただけで、すぐ1972年には安徽合肥工業大学校で工場の工員になりました。しばらくして私は新婚の妻と、私の従妹も一緒に華僑の身分であることと、また老いた両親の世話を理由に出国を申請し、およそ3ヶ月で許可されて、1972年の年末に香港にやって来ました。

以上、1960年代以降の金門人の香港移住の例を見ると、金門人は地縁関係によってまず福建に移住し、次に福建から香港に移住している。あるいは60年代のインドネシアの華人追放運動がもとで、インドネシアに移住した金門人の少数は直接香港に移り住んだが、大部分はまず福建に移住してから文革を経験し、文革後の開放政策によって華僑の身分で香港への移住を申請している。香港に移住する理由や、海外へ移動する理由には、これまでの海外へ移民に出る理由に比べ、そこには特有な性質がある。

三、香港金門同郷会の成立と活動

香港金門同郷会は1988年1月、設立に向け計画が準備された。薛慶華、黄定堅、黄江中、黄国勝、洪志堅、蔡建和らが設立者となり、九龍旺角の華興旅店で準備委員会を招集した。発起人のひとりであり二度理事長を務めた黄定堅氏には、2007年12月のインタビューの中で、同郷会の成立と活動について非常に詳細な説明を頂いた。

1988年2月7日の同郷会成立準備委員会の召集人は薛慶華氏と黄定堅氏、文書係は黄江中氏と洪志堅氏、財政担当は薛樹錚氏、会計は蔡世氏、連絡員は黄維岩氏、黄汝漢氏、黄雪麗氏、許秀珍氏、黄棋源氏、黄乃強氏、蔡承功氏、蔡自成氏、翁加振氏、童振仁氏、薛水貫氏、汪旺山氏、羅明禮氏らであった。同年2月21日パーティーを開いて正式に成立を宣言した。成立主旨は「金門籍同胞同志のつながり、同郷間の経済文化交流の促進、相互団結精神の発揚、福利全般の追求、家郷経済文化建設への関心」である。

同郷会は1989年8月18日に香港政府に正式登録し、2000年8月18日正式名称を「香港金門同郷会」とした。歴代会長はいずれも金門出身の企業の成功者が担い、草創期には許東亮氏が長年(1992-2006)会長を受け持ち、大いに貢献した。理事長の受け持ちは順に薛慶華氏、謝聰敏氏、黄定堅氏、許秀青氏であり、現理事長は許丕新氏である。

2013年の香港金門同郷会の案内によると、2013年には会員は香港に約200戸500人で、一族関係者を合わせると800人を超える。多くが1950、60年代に帰国した金門出身の華僑、しかも1970年代に大陸から香港に定住した金門出身者であり、もとはシンガポール、マレーシア、インドネシアのバンカ島やブリトゥン島、ペカンバル、ジャカルタ、サマリタ、バリクパパン、ベラワン等の地及び中国福建省各地に分散して住んでおり、香港に移住した金門人の多くは早期に東南アジアに移住した人々である。2012年2月に黄定堅氏は香港に定住する金門人の詳細な名簿を整理して抄録にまとめており、今後もさらに整理が進められるだろう。『金門郷誼報』(未見)は香港金門同郷会の活動状況を伝えており、今後さらに調査を進めていきたい。

香港金門同郷会は成立後から早くも、同郷会と金門故郷及び国内外の金

門出身者の連携と交流強化のため、毎年団体を組織して帰省し、華僑節及び世界金門日の活動への参加、海外に赴きその地の金門同郷会や金門会館の各種慶典活動への参加を表明している。黄定堅氏の記録した当会の活動に基づいて列挙すると以下の通りである。

- 1989年6月29日 代表団を組織し12人が金門を観光訪問。
- 1989年9月5日 香港経由で東南アジアを訪問する金門県長唐雄飛氏の歓迎準備。
- 1990年 シンガポール金門会館120周年記念式典参加のため代表を派遣。
- 1994年3月22日 香港経由で東南アジアを訪問する金門華僑協会会長蔡振益代表団を歓迎し、歓迎会を開催。
- 1995年1月18日 香港訪問の金門県長陳水在氏を歓迎し、座談会並びに宴の場を設けてもてなす。福建省金胞連10周年祝賀式典に代表を派遣。
- 1997年10月14日 黄定堅氏率いる15人の代表団が華僑節祝典参加のため金門へ戻る。
- 1999年8月 ジャカルタ金門会館祝賀式典参加のため代表団を派遣。
- 2000年6月27日 インドネシアバリクパパンの金門同郷慈善会名誉主席の楊文夫妻が香港到着、市の同郷を多数招待して茶会に同行。
- 2000年10月14日 陳其章理事が率いる代表団6人を派遣して金門県華僑節に参加。
- 2001年2月 福建省金胞連15周年祝賀式典に代表を派遣し参加。
- 2001年6月24日 理事長黄定堅が団員15人を率いてジャカルタ金門互助基金会5周年祝賀式典に参加。
- 2001年12月20日 理事長黄定堅が団員18人を率いてマレーシアクラン市の慶祝金門会館55周年を祝う祝典に参加。
- 2002年10月 魏宗勇夫妻を派遣して金門県華僑節に参加。
- 2003年12月18日 許永恵が泉州市金門同胞連誼会を率いて香港に到着、理事数人を招いて茶会で歓迎する。
- 2003年 金門県に代わり政府出版の『金門』季刊をインドネシアのバ

リクパパン、サマリタ、ベラワン、タラカン、スラバヤと中国大陸各地の金門人あわせて100数人、合計600冊を配布。当時インドネシア政府は中国語の刊行物を輸入禁止していたため、香港で持ち運びを人に託した。このため、スラバヤの金門人黄啓鏞は観光と親族訪問のため金門に帰省し、さらに金門黄氏宗族会と水頭寺廟に寄付した。

2004年8月29日 福州市金胞連の黄炳瑞、黄蓮治が香港に到着。旧知を10数人ほど招いて歓迎の茶会に同行。

2004年10月12日 金門県長李炆烽代表団15人が香港に到着。全理事を招きチムサーチョイの鴻星酒樓にて歓迎会を開催。

2004年11月11日 謝聰敏ら5人を派遣して廈門市金胞連5周年記念祝賀会に参加。

2004年12月31日 謝聰敏、許丕新を派遣して金門県主催の第一回「世界金門日」活動に参加。

2005年11月13日 謝聰敏ら4人を派遣して福州市金胞連20周年記念祝賀会に参加。

2007年年末 理事長許秀菁が自ら団を率い、クアラルンプールの楊忠礼親族が主催する第一回「世界金門日」活動に参加。

2010年7月 金門水頭の「得月樓」に観光スポットとして修繕費を贈与。

以上、香港金門同郷会の活動は、東南アジア各地や兩岸に分散して居住する金門の華僑に働きかけてその社会ネットワークを駆使している。国境を跨ぐことはイデオロギーをも跨ぐことであり、新たな形の交流の道を構築したことがわかる。

四、結語

金門における18世紀から20世紀半ばまでの海外移住ブームを4つに分けたが、外的原因のほかに、主に経済問題、社会の不安定及び戦乱といった内的原因がある。金門人の香港への移住は一括りに移民ブームとは言えず、原因や背景はどうやら外的、内的原因で十分に説明できるものではな

いようだ。1949年には金門出身者だけでなく、海外に住んでいた華人が中国に帰国して帰国華僑となり、1960年代には東南アジア各国の華人排斥も多く、帰国華僑を作り出した。しかし文革終息後、一部の帰国華僑は再び積極的に母国を離れており、香港に移住した金門人のケースはいま一度熟考に値する。香港の金門人社会と同郷会組織をさらに継続して深く調査研究していけば、華人のディアスポラ研究に新たな発見が得られるであろう。

また、いわゆる「華僑」、特に「香港帰国華僑」に対する中国の身分認定問題では、「香港帰国華僑」に対して一律に「海外中国人」あるいは「大陸中国人」と称していることが適切なのかという点も再検討に値する問題であるが、「香港帰国華僑」及び「香港金門同郷会」のキーパーソン故許東亮氏（1915-2008）に関する研究論考は別稿に譲る。

追記：本稿は、国研プロジェクト「東アジア島嶼部における華人圏研究—金門島研究を中心として—」（代表者：黄英哲、2016～2018年度）による研究成果の一部である。2020年4月脱稿。

主要参考文献：

『金門縣志』 金門県政府、1987年

江柏煒「僑郷文化—華僑網絡、僑郷社會及其物質文明：19-20世紀の金門島」（陳奇中編著『金門學概論』台北：東華書局、2017年、89-154頁）

地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会編『地域研究』第11号（特集「金門島研究—その動向と可能性」）、2011年3月

『香港金門同郷會簡介』香港金門同郷会、2013年

『香港帰僑 赤子情懷』上下巻（帰国華僑史料叢書香港編之一）香港：生活文化基金会、2018年

許丕新氏提供の香港金門同郷インタビュー記録（未出版）

黄定堅氏抄録の香港金門同郷会記録（未出版）

謝辞：拙論執筆には金門出身で香港の重要な華僑のリーダーであった故許東亮氏の御子息で現香港金門同郷会長の許丕新氏に多大なるご助力を頂い

た。心より謝意を申し上げる。

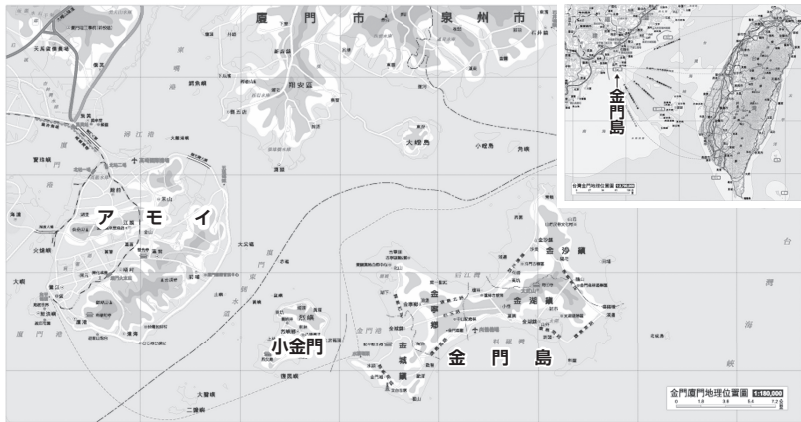


図1 金門島の位置図

(金門島政府、2008年)

出典：川島 真「金門島の概況」(『地域研究』VoL.11 NO.1、地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会、2011年3月、17頁)

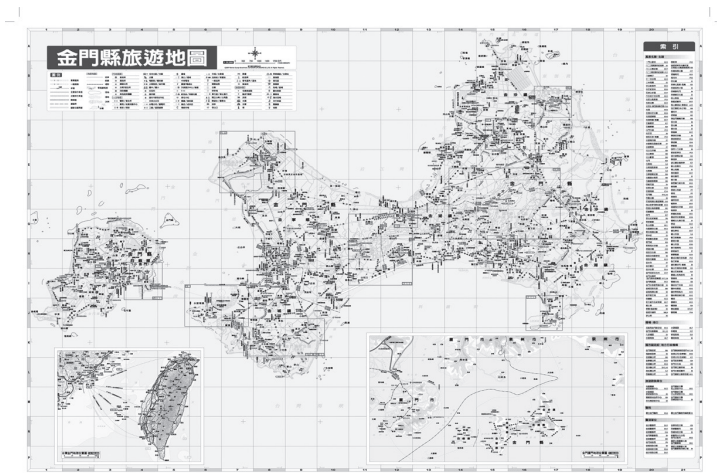


図2 金門島全図

(金門島政府、2008年)

出典：川島 真「金門島の概況」(『地域研究』VoL.11 NO.1、地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会、2011年3月、17頁)